

次世代活躍推進特別委員会記録  
【速報版】

令和8年2月5日開会

# 速報版

- ・この会議録は録音を文字起こしした初稿のため、誤字脱字がある場合があります。
- ・正式な会議録が作成されるまでの暫定的なもののため、今後修正されることがあります。
- ・正式な会議録が掲載された時点で速報版は削除されます。

横浜市会

開会時刻 午後1時30分

◎ 開会宣告

- 竹野内猛委員長 これより委員会を開会いたします。

上着の着用は、御自由に願います。



◎ 調査・研究テーマ「こども・若者の不安を取り除き、将来への希望が描ける支援」について

- 竹野内猛委員長 それでは、議題に入ります。

調査・研究テーマ、こども・若者の不安を取り除き、将来への希望が描ける支援についてを「議題」に供します。

なお、本日はオブザーバーとして、政策経営局、こども青少年局及び教育委員会事務局の関係職員にも御出席いただいておりますので、御了承願います。

初めに、本日の委員会の進め方を御説明いたします。

本日まで、自由民主党、公明党、立憲民主党・無所属の会、国民民主党の委員の皆様がそれぞれ行政視察を実施し、他都市における事例を調査していただきました。そこで、本日はまず、これらの行政視察につきまして各会派から御報告をいただきたいと思っております。

そして、その次に、本委員会の中間報告書の作成に向けまして中間報告書の構成案を御確認いただき、委員の皆様からまとめに向けた御意見をいただきたいと思っておりますので、よろしく願います。

それでは、行政視察の報告ですが、資料1を御覧ください。

視察月日等は記載のとおりでございますので、視察実施順に各会派から御報告をお願いいたします。

初めに、自由民主党の報告をお願いいたします。

- おさかべさやか副委員長 私たち自民党は、昨年8月20日と21日に岐阜県のみんなの森 ぎふメディアコスモスと富山県のとやまこども・若者みらいプランを視察に行っていました。

みんなの森 ぎふメディアコスモスは、建築家、伊東豊雄さんが設計した岐阜市立中央図書館を核とする知、絆、文化の総合交流施設になります。木造の波打つ屋根や開放的な空間が特徴で、屋根のついた公園をテーマに、誰もが心地よく滞在、活動できる市民の憩い場となっていて、開館から10年以上が経過しても、多くの自治体からの視察が後を絶たない図書館とは思えないおしゃれな空間として有名です。私たち議員も、すごい写真をたくさん撮ってしまって、建築、そして空間も魅了されるような場所でした。

岐阜市では、読書は孤読、1人で読むではなくて共読、共に読むを推進していて、本を読んで感じたことなどを他者に伝えるところまでが読書であると教えています。子供の声は未来の声をモットーに、話し声や、あるいは泣き声なども響くにぎやかな空間でした。同じ県内に岐阜県立図書館があり、そちらは静かで専門書が豊富な図書館であることから、自然と利用者のすみ分けが行われていました。

また、子ども司書育成講座や子供ラジオ、それから中高生を対象に小説を投稿してもらって、それを岐阜県出身の直木賞作家である朝井リョウさんが選考する、ぼくのわたしのショートショート発表会など、こども・若者が参加できる仕掛けも様々行われていました。横浜市も大型図書館を予定していますので、学ぶべき点が大いに感じられる視察でした。

メディアコスモスが子供たちの夏の居場所として、積極的に子供たちが来ている場所になっていたこともとても印象的でした。特に重要に感じたのが、図書館を教育委員会の下に置かず、観光やまちづくりの視点に入れて運営していることでした。この点を横浜市も今後前向きに検討すべきと思いました。

翌日行った富山県議会では、とやまこども・若者みらいプランについて学ばせていただきました。

富山県は、日本全体の人口減少よりも早く人口減の傾向が始まり、現在100万人を切っているということで、このプランは子育て支援・少子化対策条例に基づく基本計画を策定するものとなります。

富山県は、15歳～34歳の若年世代、特に就職期と重なる20代前半の女性の転出超過が続いていて、若年世代の男女の人口のバランスが崩れているという問題があり、若い就職期の女性に選ばれる県となることが喫緊の課題とのことでした。そのため、企業を含めた官民が一丸となって若い世代の未来を応援する社会づくりを推進するため、このプランを策定されたそうです。

このプランの特徴として、一つ一つのテーマについて課題を網羅的に洗い出し、丁寧に対策を講じ、できる限り数値目標を設定して改善に向かおうという姿勢があり、その点が参考になると思いました。子育て支援にしても、少子化対策にしても、どこにどの程度の予算を割けば効果が安定して得られるものか予測することは極めて難しいですが、横浜市も真摯に積み上げていくしかないだろうと改めて学ばせていただきました。

私からの報告は以上になります。

- **竹野内猛委員長** ありがとうございます。次に、国民民主党の報告をお願いいたします。
- **深作祐衣委員** 私たち国民民主党は、去る令和7年8月25日～26日にかけて福岡県福岡市で行政視察を行いました。今回は、若者の就労支援と居場所を失った若者へのアウトリーチ支援というフェーズの異なる2つの先進的な取組として調査をしたつもりです。

1点目のJACFAと呼ばれるところですかね。ここでは就労支援の最前線ということで若者の就労と自立支援、福岡若者サポートステーションを運営しているのがこのJACFAになりますが、全国トップクラスとなる87%の高い就職定着率を誇っているところになります。

個人的に特筆すべきだなと思ったのは、メタバースを活用した就労支援というものが新しいなと感じました。令和5年度から全国に先駆けて本格導入されていて、バーチャル空間に再現されたカフェとかコンビニの環境で、アバターになって接客や敬語の訓練などをするというような、実際に活用してみないとなかなかイメージが湧きづらいかもしれませんが、お客さん役をやる方と実際に買物に行く方が支援者さんとして、このJACFAのスタッフさんがいらっやあって、そういったところで訓練をされていくと。外出がなかなか困難である状況にある若者の皆さんにとって、かなり心理的なハードルは下がるということで、そういった在り方で社会との接点を持つ有効な一歩なのだろうなと感じました。

一方で、現行制度の課題みたいなのも感じておりまして、これは厚労省ですが、規定によって高校3年生や大学4年生の1月からしか、こういったところに本登録できないみたいな制限があるので、就職活動の早期化に対応できないといったような、なかなか市独自で改善をしていくことは難しいのと思うのですが、国に対する要望も必要なのかなと感じたところです。現場からは、中高生とか高校3年生、大学の4年生の前に当たる子供たちに、若者に対しても支援を求めていく必要があるんじゃないかなという声がありました。

あと、次に行きましたのが、特定非営利活動法人あいむというところですけども、ここではアウトリー

チと伴走支援をメインで視察をしました。

繁華街で悩みを抱える若者を支援するということをやっているからといって、待つ支援ではなく、警固公園と呼ばれる福岡ではここに結構若者が集まってしまうという場所ですけれども、そこに直接赴くという夜回りになるアウトリーチ、これを起点とした活動を展開されていました。2024年には延べ1000人を超える方と接触をして、必要に応じて警察や医療機関への同行支援、あとは食料支援、そして緊急時の宿泊支援など、包括的なセーフティーネットを構築されていました。

私と同年代の方が代表として支援をされていましたが、修理工場のような構成ではなくて、若者が自分自身の価値を再発見して自己注意力を高めるまで寄り添い続けることをやっているのだとおっしゃっていたのがすごく印象で、孤立しがちなこの社会に求められている支援の真髄はこういうところにあるのかなと痛感したところです。

今回の視察全体を通して、SNSやバーチャル空間といったデジタルの活用と、人と人が直接向き合うアナログの温かみのある伴走支援の、この双方が若者支援の両輪として必要ではないかなと感じました。

以上で報告を終わりたいと思います。

- **竹野内猛委員長** ありがとうございます。次に、公明党の報告をお願いいたします。
- **武田勝久委員** 私たち公明党は、11月13日～14日、福岡県と広島県を訪れまして視察を行いました。

初めに、福岡県では、1つ目として県立高校における金融リテラシー教育についてヒアリングを行いました。

まず、この事業の経緯についてですが、この金融教育を受けたと認識している人は僅かにすぎないという中で、金融知識の不足は借金や詐欺などのリスクにつながります。若いうちから金融リテラシーを身につける教育が不可欠であるという認識の下、福岡県の知事に関心を持っておりまして、県知事のトップダウンで全国に先駆けて県立高校での教育事業が開始されました。

主な概要ですけれども、令和6年度から福岡県全県立高校111校で高校1年生を対象に実施しております。出前講座と共通教材の作成が主な事業であります。学校現場の負担軽減のために、金融業界の民間事業者の共同体に委託しております。出前講座の形態や時期は、学校側の希望に合わせてクラス別や学年別などで実施をしています。

内容としては、ライフプラン、家計管理、資産形成、ローン・クレジット、金融トラブルなど、広く浅く内容を約50分で行う講座となっています。また、生徒のタブレットなどでアクセスができるポータルサイトを令和7年度に開設して、主体的に学ぶ環境を整備しています。

本事業の課題であります、とにかく内容が盛りだくさんですので、本当はもっと時間をかけて実施したいところですが、やはり学校内では限られた時間しか確保ができないということです。また、金融トラブルが若い人にも広がっているという実態を踏まえて、この講義の対象を中学生や小学生まで広げていくことも必要ではないかということです。また、共通教材の柔軟度を上げることやポータルサイトの充実などが課題として挙げられておりました。生徒たちが将来にわたり、経済的に自立をして豊かな生活を送るための基盤を築くことにつながる、有意義な事業であると感じました。

福岡県の2つ目としまして出会い・結婚応援事業ということで、概要ですけれども、この事業は結婚を望む方に対しての出会いの機会を提供する事業です。福岡県は、機運醸成として出会いの場の提供など、結婚のきっかけづくりに取り組む企業や団体を、出会い応援団体として登録拡大をしています。これは平成17年

から進められて、令和7年3月時点では3000団体を超えています。この応援団体が自主的に出会いイベントを開催しています。

また、企業・団体間マッチング支援センターというのがあるのですが、こちらでも体験型のイベント開催のバックアップをしたり異業種団体のマッチング、またAIを活用しての相性のよいグループ同士のマッチングなど、民間の結婚相談所とは違う角度で取組が行われております。社会全体で応援をしていこうという意気込みが感じられました。

課題としましては、こういったイベントになかなか参加ができない、またちゅうちょしているという若者に合わせたイベントの在り方、参加ハードルが下がるように工夫をしているところであります。また、昨今、結婚を選択しないなど価値観が多様化する中でありますので、これが押しつけにならないよう、この事業の打ち出し方には配慮が必要であると、時代の変化に対して対応を適切に行う必要があるということです。

この事業についても民間委託ではありますが、このような発想の柔軟性や質の高いアプローチなど、民間で実施するメリットを感じることができました。

次に、広島県地域若者サポートステーションですが、こちらは若者の就労支援についてヒアリングを行いました。

主な取組として、面談、キャリアデザインやコミュニケーションなど、様々なセミナーや職場体験、就労後の定着支援を行っております。

こちらの特徴としましては、就職氷河期世代である40歳代への支援も行っております。派遣を短期で繰り返している方や、ひきこもりが長くなってしまっている方に対する支援、こちらの方に若年層との課題の違いを踏まえて特に面談を重視しているということです。また、サポートステーションでは、対応が難しいメンタル面のケアに対して臨床心理士のスタッフを入れて対応しております。今年度は、障害者とグレーゾーン発達障害や生きづらさを感じる方への支援をスタートしておりまして、障害者福祉の分野にいたスタッフに来てもらってハローワークや福祉分野につなげることを行っております。また、御家族に対する支援も行っておりまして、ひきこもりの相談とかもあるそうです。

課題としては、広報について、やはり若者はネット世代でありますので、紙媒体ではなかなか届きにくいということで、サポートステーション利用者の方は、多くの方は自分で検索をして見つけてきましたと、このような支援があることを早く知りたかったという声が多い一方で、人との関わりを持たない今の世の中でどのようにアプローチしていくかということは難しいということがありました。

このようにサポートステーションは単なる就労支援にとどまらず、様々な困難を抱える若者の居場所であり、立ち直って社会参加をしていこうと、それを多角的に支えるための機能になっておりますので、若者が抱える内面的な課題へのアプローチは今後も重要であると感じました。

非常に有意義な視察でございましたので、今後の市政運営にしっかり生かしていけるようにしたいと思います。

- **竹野内猛委員長**    ありがとうございます。次に、立憲民主党・無所属の会の報告をお願いいたします。
- **藤崎浩太郎委員**    我々は、11月20日に福岡市、21日に北九州市にお邪魔をしてきました。

まず、福岡市、初日です。福岡市では、里親養育推進の実践事例及びパーマネンシー保障を目指す家庭養育についてということで、約6割程度の里親委託率を誇っている福岡市にお邪魔して、どういう里親支援をしているのかなということを伺ってきました。

今年度の調査・研究テーマでも、こども・若者の不安を取り除きとあるのですが、社会的養育、社会的養護の環境にある子供たちが、どういった希望を持って生きていけるかというのは非常に重要だと思いますし、里親支援が充実している事例として、においても盛んに取り上げられてきた福岡市から学ぶことは多いかなと思って福岡市を選択しています。

福岡市は、もともと児童養護施設が少なかったことで、市外の施設に児童養護をお願いするしかなかったということがあったという背景で、そこから児童養護施設に頼らないというか、委託するのではなく、里親支援というものにかなり力を入れてきたということが一つあります。横浜市の社会的養育推進計画でも、パーマネンシー保障が今回位置づけられています、率先してこのパーマネンシー保障に取り組んできたのも福岡市の特徴です。

パーマネンシー保障としては、横浜市の場合は、親子関係の修復に配慮しつつ、子供と支援者、養育者が途切れない安定的なつながりを構築することにより子供の成長を支援するという定義をし、福岡市では、全ての支援における上位理念として、このパーマネンシー保障を位置づけて、親や子供の置かれている状況を把握して家庭復帰を第一に計画を立てると。必要な場合は、里親委託や養子縁組などが行われるという取り組み方をしています。結果的に、平成17年度の施設委託が367名だったことに対して、令和5年度には施設委託は119名まで減少していて、250名ぐらい里親施設委託が減ってきているということです。それだけ家庭復帰であったりとか、里親委託にシフトしているということです。

里親支援においては、これまでも横浜市会でも様々議論がなされてきましたが、お話を伺って非常に感じたのは、里親に寄り添った支援策を充実させてきているというのが大きな特徴だと感じました。いろいろポイントはあったかなと思うのですが、里親の相談先の確保ですとか在宅支援の充実、また委託を受ける際の手続の問題について、福岡市は里親さんの立場を十分に理解し、里親さんの立場から支援策を構築されているというのが特徴だったと思います。

例えば、保育園に預ける必要があるような子供さん、里子さんを預かる際には、保育園がその地域にそもそも空きがあるかどうかとか、空きがあることを前提に里子の委託をかけながら保育園の入園手続なんかと一緒に見相のほうで取り組んでいってくれるといったこともなされていて、横浜とはそういう意味で里親さんに対する支援環境が全く異なるというか、手厚い環境が用意されています。

家庭復帰ということを含め、親族養育とかも含めて長期的に安定した環境が得られるような取組をしようということで、子供も、実子も、そして里親も孤立しないように、頼れる人や相談できる人を増やす取組と永続的で安心できる家族や家庭、養育環境が構築できるようにと施策が展開されているというのが大きな特徴だったと思います。

次に、翌日、北九州市にお邪魔しました。北九州市は、Z世代はみ出せコンテスト2025についてという視察内容にしましたが、Z世代課というものを全国において初めて設置したのが、この北九州市の大きな特徴です。Z世代課なので、若い人たちと共に仕事をするということで、職員構成も平均年齢が28.3歳という課になっていて、課長自身も当時最年少課長で、たしか40歳か41歳ぐらいで課長になっているということで、若い人たちが若い人たちを支援するという取組方がなされています。

北九州市においても課題としては、若年世代が転出してしまうという課題がこのZ世代課の新設の要因になっているということで、北九州市におけるZ世代課は、日本一若者を応援するまち・北九州市というキャッチフレーズを掲げながら、若い世代のニーズや価値観を学んで時代の変化にスピーディーに対応する

ことで、持続可能な北九州市となるということを目指しているということ、あくまでも主役がZ世代であるということに力が置かれ、そのコンセプトが貫かれているというのがやはり重要なポイントだったと思います。

これまでも、若者支援策といえば、ひきこもりとか、就労とか、移住・定住支援というのが北九州市でもよその都市と同様に行われてきたものの、なかなか効果的な横串を通す仕事ができなかったと。その横串を通すのがZ世代課の役割でもあるということで、Z世代の特徴である自分らしさを大切にするとか、承認欲求が強いとか、効率性を重視するとか、フラットなコミュニケーション力があるとか、そういったところをしっかりと把握しながら取組を進められていました。

その中でも特徴的であったZ世代をはみ出せコンテストというのは、若者らしい新規性や独創性のあるプロジェクトという条件で募集するのですが、必ずしも北九州市に住んでいなくてもいいので、2024年度は29件の応募と、2025年度はさらに60件の応募があったそうですけれども、東京、千葉、岐阜、広島、京都など、全然北九州市から離れた地域からもたくさんのお応募があると。そういったよその都市からも注目されることで、いわゆるIターンというか、北九州市に住みたいと、北九州市で働きたいという若者が出てきてもらいたいという意図も込められていました。

そんな中で事業提案を行うので予算もつくのですが、300万円の補助がつくのですが、経済局がやるようないわゆるスタートアップ支援ではないので、事業性が本当にあるかどうかはそれほど重視されていないので、とにかく新しいことを一生懸命やろうとしている者を応援していくというコンセプトで、その中でも2024年に1位で採択されたのは北九州市の成人式をVRで行うというものが1位になっていて、北九州市といえば、成人式が非常に有名なわけですが、その会場にモニターとかを置いて、アバターが北九州市のリアル会場に参加できるようなことをやっていたりとかしています。それ以外にも、小倉でコーヒーの農場を造る取組とか、福祉ロボットのプロジェクトとか、そういったものが採択されて取組が続けられているということです。

Z世代課という特徴ある名前のおかげでメディア露出も100件以上ということで、かなり情報を発信するリーチしていく力にもなっていて、この事業を行う上で若い世代にちゃんとリーチしていくかどうかと、若い世代、Z世代が主体として取り組めるかどうかということが非常に重要視されていました。

そもそも、これを若者支援課みたいな名前にすれば、どこにでもあるので注目されませんが、私たちが視察に行くぐらい気になる名前をつけていることで、それそのものが広報ツールになり、Z世代課とつけていることで、当事者が自分のための、要は若者といっても幅が広いので、Z世代と言われることで自分たちのため、自分のための部署であるということが理解してもらいやすかったということ。そういったものを通じて、今はZ世代から出てくる知見とかを、どうやったら市政に反映できるかということも考えて取り組まれているということで、ともすればというか若者を支援していますよという行政の都合でやると、行政はそれで何か形ができたとしても、本当に若者当事者のものになっているかどうかは別問題になりやすいけれども、このZ世代課においてはZ世代の若者の意見をとにかく形にしていこうと。それで役所や地域に、行政や地域企業に新しいエネルギーとか新しい発想を取り入れていこうということで、徹底的にZ世代を主役にしようとしていたということが大きな特徴だなと思いました。

○ 竹野内猛委員長 御報告ありがとうございました。

ただいまの各会派報告につきまして、御質問等がございましたらお願いいたします。

(発言する者なし)

- **竹野内猛委員長** 特によろしいですか。私から一言だけ、すみません。

こども・若者の将来不安を取り除くというテーマの下、各党派、多様な切り口で視察いただきまして御報告いただきました。まだ社会に出て間もない、あるいはこれから社会に出ようという、このこども・若者が、希望ではなくて既に多くの不安を抱えていることは改めて憂慮すべき状況だなどと思っております。引き続き個別に、あるいは議会での議論を通じて必要な施策を共に模索してまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは次に、本委員会の中間報告書の作成に向けまして、事前に正副委員長において協議し、中間報告書の構成案を作成いたしましたので、私から説明させていただき、その後、委員の皆様から中間報告書のまとめに向けた御意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、資料2の令和7年度次世代活躍推進特別委員会中間報告書構成（案）を御覧ください。

こちらにつきましては、本委員会の1年間の活動について、このような構成でまとめていきたいというものでございます。

1ページ目～3ページ目にかけて、付議事件、調査・研究テーマ、テーマ選定の理由、活動内容、意見等として各委員会の議題や委員意見概要等を記載いたします。

次に、こども・若者の不安を取り除き、将来の希望が描ける支援についてのまとめという5つの項目立てとなっております。

私からの説明は以上です。

それでは、中間報告書のまとめに向けた御意見等をお願いいたします。

- **武田勝久委員** 第1回の委員会の中にもありましたが、今年度が初年度ということで、御意見の中に課題を幅広く洗い出して共有することが本年度は重要であろうかというような御意見がありました。先ほども各党派の視察の内容をお伺いいたしましたし、若者・こどもの活躍推進といいますが、本当に様々な施策もあれば、多様な視点もあるのだなど改めて感じさせていただきました。この1年で何かまとめられるかどうかという、それも難しいかなとも思っておりますので、結論を出すというよりは、うまく整理をして次年度につながるような、そういった取りまとめでいかがでしょうかということで意見させていただきます。

- **竹野内猛委員長** ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

- **井上さくら委員** 先ほどの視察の報告も大変意義のあるお話で勉強になりました。テーマもとても幅が広くて、皆さんの御意見もあるように、背景もますます複雑になっているという中で、なかなか一つの結論を導くのは難しいかとは思いますが、前回の参考人の宮崎先生のお話などでも、アプローチの入り口のところは、今までとのいろんな変化があつて、IT技術であるとか、そういう今の若者にアプローチするものというのが工夫が必要だけれども、結局それを経て最終的のところはやっぱり人間が、人が対応するということが非常に重要だと。前のところのいろんなところから、結局はその人それぞれの持っているものは全く違うので、そうするとある程度経験を持った人が直接会話をしたり、何が原因なのかという寄り添っていくという、これがやっぱり必要だというのが宮崎先生のお話でも私はとても印象に残っております。

ぜひ横浜市においてもアプローチの工夫と併せて、中間支援とか、それから専門職とか、そういうこども・若者の支援に経験を積んだ人、人材といえますか、そういう支援ができる人を継続的に育てて、専門職を増やして、そして現場に近いところにそれができる人たちを配置するというか。その点は横浜市も大変人

が足りなくてとか難しい面はあるかもしれないけれども、結局そこをやらないと駄目なのじゃないかと思えますので、その点のきちんと職員や民間も含めて人が人に対応できる、そこにお金も、それから権限も付与していかなくちゃいけないと思えますので、その視点は入れていただけたらと思います。

- **竹野内猛委員長** 大事な御指摘だと思います。

ほかにいかがでしょうか。

- **おさかべさやか副委員長** 今年度初めて立ち上がった委員会ということで、まずは課題整理、武田先生からもありましたけれども、そういうことだったと思えますが、もうちょっと情報収集が欲しいなというところです。

がんサバイバーじゃないですけども、不登校サバイバーとか、ひきこもりサバイバーとか、実際そこから脱出した人の事例。そういう事例でいくと、すぐさかなクンとか、芸能人とか、YouTuberで不登校のお子さんとか、そういうところに行ってしまうのですけれども、そうじゃなくて、もっと会いに行けるアイドルじゃないですが、横浜市で不登校になっちゃって、でもそこから違う道に行った、そういう実在の子供の情報とか、そういうのはもっともっと集めてほしいなと、そういう子たちの意見を直接もっと聞いてほしいなと思えます。

こども・子育て基本条例をつくって、子供の声を聞くということを今年度からやってくるということでしたので、やっぱり当事者の意見をもっと聞いてほしいですし、成功事例。ルートを外れてしまったら、もう二度と戻れないという社会であること。例えば非正規にずれ落ちてしまうと二度と正社員に戻れないという大人社会を見ると、子供たちは一回外れちゃったらもう駄目だ、戻れないという物すごく絶望と壁にぶつかると思うのですけれど、そうじゃないよ。外れちゃったけれども、こんな道があったよ。自分にはこんな道があったよ。僕にはこんな道があったよというそういう事例、ほかのルートというのを示してあげることで、当事者もですけども、親も楽になると思うのですよね。ぜひそういった事例を、100人でもいいですし、様々な年代の声を集めていただきたいというのが私個人の要望になります。

- **竹野内猛委員長** 大事な御指摘だと思います。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

- **大和田あきお委員** 宮崎先生の指摘もすごく参考になったのですけれども、不登校状態というのは特に横浜も多いですけども、全国的な課題でもあるので、宮崎先生の調査では、全体の3%で約35万人近くの人が不登校状態という指摘もあります。感じることは、学校現場での原因というのも結構あるのですよね。不登校の原因の中に、学校現場でのトラブルみたいなものが結構実際に多いということも挙げられています。それはもちろんいろんなケースがあるのですけれども、そこで友達同士という関係、子供たち同士の関係と、教師と子供たちの関係というのは非常にある意味で、本当にそういう意味では密接でなくて希薄になってきている面もあるのじゃないかなという気がします。

どういう意味かということ、表面的な付き合いじゃなくて親身に話し合える関係という意味で、子供たち同士もそうなのですけども、教師があまりにも多忙でゆとりがなさ過ぎる。特に横浜市は正採用の教員の採用は少ないのですよね。非常勤の方が多いので、仕事がどうしても正規の方に偏ってしまうと。それから、非正規を多く採用すれば、どうしても代替の臨任とかそういう人が、そういう人の対応が非常に不十分。いろんな小中学校の校長先生もお会いしているのですけれども、一番の悩みは代替教員がないということも言っています。学校現場を本格的に横浜市は見直す必要があるのじゃないかなと思います。私の教員時代

も、不登校がいたら、忙しくても1年、半年、付きっきりで関わっていったのですよ。そういうゆとりがないのです。

だから、教員自体にゆとりがない。そうすると、子供たちにも、おのずと教員との関わりが薄くなったり、子供たち同士の関わりも表面的にならざるを得ない部分もあると思うので。特に35人学級が今度は中学校でも始まろうとしているのですけれども、欧米では大体20人～25人が普通の学級編制ですから、30人以下をまずはやっていくとか、そういうことを含めて教員の多忙化の対策、正採用の教員を増やすということとか、今言った30人以下学級とか、そういうのを横浜市がまず小中高でできることはあるのじゃないかなと。予算はかかるでしょうけれども、特に横浜が打ち出すことによって、全国へのいい影響が波及していくのじゃないかなという期待がありますので、ぜひ今後、教育委員会を中心に検討していただきたいと思っています。

○ 竹野内猛委員長 貴重な御指摘、ありがとうございます。

○ 藤崎浩太郎委員 難しい特別委員会だなと思って最初始まったなと思いながらも、今日の皆さんの報告を聞いていても、これは委員長はまとめるのは大変だなと思って伺いました。今日もいろいろ皆さんの御意見を伺って感じたのは、特別委員会でやっている意義というのがすごい重要なのだろうなと思いました。

事業そのものでいくと各局の事業になってしまいますし、そうするとあんまり細かい事業でやると、特別委員会でやる必要があるのかみたいなことも、委員長、副委員長が多分考えなくちゃいけないポイントなのだろうなと思いましたし、今日も視察でも、こども・若者といっても、年齢も立場も当然皆さん違うし、例えば二十歳といたって働いているのか、学校に行っているのか、ひきこもりで課題を抱えているのかとか、子供というのは、私たちは里親・里子ですけれども、そういうケースもあれば、いじめを受けている子供もいるとか。こども・若者という言葉に含まれる多様な存在の中に、特別委員会ならではの横串を刺せるような議論を、今後継続してできるといいのじゃないかなと感じました。

じゃあ、どう横串を刺すのかというのは非常に難しいところですが、今回の視察だけでも対象としている若者や子供が全然それぞれ違ったと思うので、そこら辺の我々がこども・若者と言ったときに、こども・若者というのはどんなこども・若者がいるのだろうかというものをちゃんと我々が整理して持っていく必要もあるなとも感じました。

今年度のテーマ上は、皆さんでいろんなところを見ていくことに意義があったと思いますし、皆さんがいろんなことを持ち寄ってくださったので、今の視察報告もすごい示唆に富むものを我々は得ることができたと思いますし、これが1つのテーマに深掘りをしたときにも、いろんな比較ができて面白いのだろうなと思いますが、いずれにせよ来年度以降に話を展開していけるといいよねということも当初から言われていた中で、今回の視察においても、じゃあそれを皆さん、誰を見てきた、誰を対象にする事業を見てきたのだろうかということの整理とか、それはどうしたら横浜市に展開できるのだろうかの間にある横串みたいなものを継続的に描けるようなまとめ方をさせていただけるといいかなとも感じました。

そういう意味では、視察報告というのは多分文章としてまとめられると思うのですけれども、事務局の手が大変かもしれませんけれども、忙しいかもしれませんが、それぞれじゃあ誰を見てきたのだからみたいなのを表になっていたりすると、高校生対象だったのかとかあると思うのですね。うちだったらZ世代といっても広いので、Z世代と言いながらも対象年齢は広いし、県立高校といえば高校生だしみたいな、我々が何を見てきたのか、誰を見て誰の施策を見てきたのかみたいなのが、その見取図みたいなのできるだけでも、今年度のうちの委員会の委員の皆さんが何に関心を持って、誰に関心を持って、何を成果としてまと

めたのが可視化しやすいかなと思うので、何かそんなまとめ方をさせていただいても報告書としては面白いかなと思いました。

- **竹野内猛委員長** 取りまとめの見え方に関して、具体的な御指摘をありがとうございました。  
ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。  
(発言する者なし)
- **竹野内猛委員長** それでは、ただいま皆様からいただきました御意見などを踏まえまして、正副委員長で中間報告書の案を作成し、次回の委員会においてお示ししたいと思いますので、よろしく願いいたします。  
それでは、本件についてはこの程度にとどめます。



◎ 閉会宣言

- **竹野内猛委員長** 以上で本日の議題は終了しましたので、委員会を閉会いたします。

閉会時刻 午後2時09分

# 速報版